

# 上野山清貢《鮭》

## 由一への挑戦？

高橋由一の《鮭》は「重文」であるが、上野山の鮭は由一の鮭のすべて逆である。由一の鮭は上を向いている。また、下ろして日が経ち生ではない。

上野山の鮭は、下を向き、下ろしてすぐの生々しい状態である。上野山は魚、鶴、原野を得意とするが、私は由一の鮭を上野山の鮭が凌駕しているように思えてならない。

上野山の「由一と比べて見てくれ」とそんな声が聞こえてくる。

中村儀介（千葉県木更津市）

## 上野山清貢《鮭》

油彩・キャンバス 75.0×33.0cm 1947年

Uenoyama Kiyotsugu Salmon



上野山清貢（うえのやま・きよつぐ／1889－1960年）

北海道江別生れ。太平洋画会研究所で黒田清輝、岡田三郎助に師事。1926、27、28年帝展で連続特選。槐樹社展で槐樹社賞を3年連続で受賞。50年一線美術会創立委員。60年没、享年70歳。

# 大沢昌助 《自画像》

## 大沢コレクションの原点

大沢昌助の自画像である。大沢ファンを自認する私には原点である。大沢先生と親交のあった川越画廊で購入した。自画像はどうしても欲しかったがその作品が目の前にある。「これは販売していただけなのですか」そんな疑問を投げかけたほど運命的な出逢いとなった。大沢二六―二七歳頃の自画像と思われる。

田中 実（埼玉県ふじみ野市）

大沢昌助 《自画像》

油彩・板 26.5 × 21.0cm 1930年頃

Osawa Shosuke *Self-Portrait*



大沢昌助（おおさわ・しょうすけ／1903－1997年）

東京生れ。1928年東京美術学校西洋画科卒。42年二科賞。43年二科会会員。54年多摩美術大学教授。65年国際形象展で受賞。81年池田20世紀美術館で個展。91年練馬区立美術館で回顧展。95年中村葬賞受賞。東京で没、93歳。

# 大沢昌助 《風景》

## 大沢昌助の絶筆か？

私の所蔵作品の中で大沢昌助の占める割合は多い。都会的な色づかい、簡略化された線、大胆な構図。私の感性と合致してとても居心地がよい。《風景》は展示してあった作品群の中で力強さはあったが何となく寂しさが感じられた。よくみると97・5・11とある。大沢の亡くなる四日前の作品だった。コレクションの集大成として求めた。大沢の絶筆かもしれないと思っている。

田中 実（埼玉県ふじみ野市）

大沢昌助 《風景》

クレヨン・紙 23.5 × 33.0cm 1997年

Osawa Shosuke Landscape



大沢昌助（おおさわ・しょうすけ／1903 - 1997年）

東京生れ。1928年東京美術学校西洋画科卒。42年二科賞。43年二科会会員。54年多摩美術大学教授。65年国際形象展で受賞。81年池田20世紀美術館で個展。91年練馬区立美術館で回顧展。95年中村葬賞受賞。東京で没、93歳。

# 古茂田守介《座る女》

## 日本人の裸婦像

古茂田守介のデッサンが好きだ。力強さがある。無駄な線がない。日本人の裸婦だ。モデルの内面まで捕らえている。デッサンの達人だ。

田中 実（埼玉県ふじみ野市）

古茂田守介《座る女》

インク、墨・紙 24.0×16.5cm 1957年頃

Komoda Morisuke *A Woman Sitting*



古茂田守介（こもだ・もりすけ／1918－1960年）

愛媛県生れ。1937年上京。猪熊弦一郎、脇田和に師事。中央大学中退。50年新制作派協会会員。美術団体連合展、国際具象美術展、日本アンデパンダン展に出品。具象絵画を追究。フォルムの求道者。東京で没。42歳。

# 正木 隆 《From DRIVING to DIVING 03-4》

## 死神に誘われた現代の夭折画家

正木隆の絵画は二〇〇三年にギャラリイ人（当時は吉祥寺にあり）で購入した。その後二〇〇五年（この時は新川にあり）にもう一点購入。依頼があり、その二点を「カオスモス'07 さびしさ」と向きあって展」（佐倉市立美術館）に出品。正木の絵画世界は夢の世界、悪夢とは云えないが、寂しいモノクロームの世界。この作品に描かれているのは夢に出てきた街だろうか、運転手の視線で右折か左折かそれとも、このまま真っすぐに行くか迷っているようだ、どちらにしても灯りのない電柱の先は暗くなるばかりだ。アトリエに訪ねて来た女性が縊死した後日、二回目の個展前に自分も同様に自死した。何故かは分からないが死神に死の世界へ連れて行かれたのか、夢の世界なら目覚めることが出来るのだが。現代美術作家では石田徹也が想起され、夭折の画家となった。二〇一三年にも二点出品の依頼があり倉庫を探したが見つからず「3331アートコレクターフェア」には家にあったドローイングを一点出品した。

鈴木忠男（東京都江東区）

正木 隆 《From DRIVING to DIVING 03-4》

油彩・綿布 41.0 × 53.0cm 2003年

Masaki Takashi *From DRIVING to DIVING 03-4*



正木 隆（まさき・たかし／1971 - 2004年）

兵庫県生れ。1998年、武蔵野美術大学大学院修了。愛知県美術館「愉しき家展」、佐倉市立美術館「カオスモス展」に出品。パブリックコレクション：国立国際美術館、東京国立近代美術館、東京都現代美術館。2004年自死、33歳。

# 恩地孝四郎 《童女浴後》

## 骨董市で掘り出した一品

この木版画は二〇〇五年「骨董ジャンボリー」（東京ビックサイト）で購入して、その年に梅野記念絵画館の「私の愛する一点展」に出品した。購入した店には付録漫画本（値段は高い方だった）があり、他にもまだ値札を付けていない紙ものがたくさんあり、何かないかと探していたら、地図類の箱の中に版画（台紙、マット付）が一点あり、「孝」の印があり恩地の木版画であることが一目でわかった。店主が云うには、それを見たお客さんが恩地ならば三〇万円はするだろうと云っていたが六万円と付けたので五万円にまけてもらった。翌日『恩地孝四郎版画集』（形象社）で調べ、作品名などが判明した。この作品は、前年（昭和二年）の第八回帝展に出品した《幼女浴後》をもとに作成したと推測できることも分かった。マットはかなりのシミがあるので、台紙から剥がし捨てたが、台紙には当時のラベル（東京新橋三宅松影堂、電銀二六三一、¥五・〇〇、恩地孝四郎）が付いており、こちらも貴重なものだ、「恩」が「思」になっている。二〇一六年の展覧会（東京国立近代美術館）には出品がなかったが、「小野忠重コレクション展」（町田市立国際版画美術館）には色違いのものがあった。裸体が複雑な色摺りなので自刷りだろう、どの様な経緯で販売されたのか年譜にも記載なし。

鈴木忠男（東京都江東区）

恩地孝四郎 《童女浴後》

木版（多色）・紙 29.5 × 18.9cm 1928年

Onchi Koshiro *Little Girl after Bathing*



恩地孝四郎（おんち・こうしろう／1891 - 1955年）

東京生れ。白馬会洋画研究所に通う。1914年藤森静雄、田中恭吉と同人誌『月映』を創刊。東京美術学校西洋画科中退。18年日本創作版画協会創立に参加。31年日本版画協会会員。36年国画会会員。東京で没、63歳。

# 山本 弘《水神》

## アルコール中毒の無頼の画家

二〇一六年に閉廊した東邦画廊との付き合いは日本橋(二回ほど訪ねた)から京橋へ移転(一階)後のラインハルト・サビエの初個展(一九九四年)からで、サビエ作品を購入したのはその二年後となる。そして同年、山本弘の東京での初個展(遺作展)があり、見に行きサビエと同等の衝撃を受けた、この作家もコレクションに値した。再度訪れた時、初日にはなかった《青い花(無題)》が架台に展示してあり購入した。その後一〇点位購入、わの会コレクション展(二〇〇九年)に二点出品、梅野記念絵画館の「私の愛する一点展」(二〇一三年)に出品した。この作品は全体が水辺(池)で、黒いものは杭なのか、右上のものが水神(石像)か、同名の作品は何点かあるようだ。晩年の大作は現代アート(ドイツ表現主義)に近い作品だが、その小品とも云える。アルコール中毒者で、その肉体と精神の中で画家は絵を描き続けた、そして縊死した。生来のカラリストで、埋もれてしまった画家の一人である、今後評価され、回顧展覧会を望む。

鈴木忠男(東京都江東区)

山本 弘《水神》

油彩・キャンバス 53.0×40.0cm 制作年不詳

Yamamoto Hiroshi *The God of Water*



山本 弘(やまもと・ひろし/1930-1981年)

長野県生れ。1948年帝国美術学校中退。池田龍雄らと交友。20代前半に飯田市に帰郷。日本アンデパンダン展等に出品。表現主義的絵画を描く。飯田市で個展活動。81年自死、51歳。飯田市美術博物館に作品50点が収蔵される。

# 山田彊一 《婆羅門シリーズ No.7 アジヤンタ No.1》

## 山田彊一のアンフォルメル時代

日本の戦後現代美術がもつとも、熱々をおびていたとされる一九六〇年代。その数年前からわが国の美術界を席卷していたアンフォルメル（未定形絵画）の洗礼を、名古屋市在住の若き山田彊一も受けることとなる。

当時の日本流アンフォルメル。それは、日本洋画におけるフォーヴィスム（野獣派）と同様、ときに造形上あまり神経のいきどろいていないような場合もあったかもしれない。

だが、同世代の同傾向の作風にくらべると、山田二三歳の本作品《婆羅門シリーズ No.7 アジヤンタ No.1》（一九六一年作）など、表現の繊細さがきわだつ。絵画として、かたちや空間がある。また、色彩にはこだわりがあった。新しい時代には新しい技法で、試行錯誤のすえ、油彩にペンキや粉絵具もあわせて使用し、類まれなる発色を得た。それが真の個性を生むこととなる。

山田は、アンフォルメルふうの制作において数年後には早くも自己の到達点に至るのをおぼえた。信奉する針生一郎からも、時代おくれと見なされる。あふれる若き才能は、その後どのような展開をみせたか。

中山真一（愛知県名古屋市長）



山田彊一 《婆羅門シリーズ No.7 アジヤンタ No.1》

油彩、塗料、粉絵具・キャンバスボード 61.0×92.5cm 1961年

Yamada Kyoichi *Brahman Series No.7, Ajanta No.1*

山田彊一（やまだ・きょういち／1938－）

名古屋市生れ。1959年現・愛知教育大学卒。64年ニューヨークの「日本人アーティスト選抜14人展」に出品。67年シェル美術賞展で佳作賞。85年和歌山版画ビエンナーレで大賞、86年IBM絵画コンクールで大賞を受賞。



# 山田彊一 《現代餓鬼草子シリーズ 太郎と花子 (No.11)》

## 山田彊一の「現代餓鬼草子 (太郎と花子)」連作

世界的にアンフォルメル時代のとされる一九五〇年代から六〇年代早々。そんななか、日本では河原温の「浴室シリーズ」、ニューヨークでは草間彌生の「ネット」など、妄執的とも増殖的ともいえるような感覚が、次世代の表現を模索していく。

山田も美術界の新たな潮流のなかで自己の芸術をもとめる。そして、一九六三(昭和三八)年ころに始まる「現代餓鬼草子(太郎と花子)」連作へと至った。二九歳時の本作品《太郎と花子 (No.11)》(一九六七年作)は、その中でもとりわけユニークなものである。

女体は「女王バチ」、ひいては「国家」だという。そこから無数に生まれ出る怪異な生き物たち。悪しき母体からは悪しき者たちばかり、と。そんなペシミズムにも、画面を大きく横ぎる女体のおおらかでポップなフォルムが、なんらか救いとなっていようか。

アンフォルメルふうの連作にひきつづき、色彩表現などにまたも新機軸を生みだす。ポイントは和紙(障子紙)の使用だという。紙質にすぐれ、木工用ボンドなどで幾重にも貼ったすえ墨、および白のポスターカラーで描くと、半透明の絶妙な色調を得た。本連作があったからこそ、近年の妖怪シリーズが生まれたという。

中山真一 (愛知県名古屋市長)

山田彊一 《現代餓鬼草子シリーズ 太郎と花子 (No.11)》

墨、水彩、紙・和紙、紙 91.1 × 91.5cm 1967年

Yamada Kyoichi Taro and Hanako from the Modern Gaki Soshi (Hungry Ghost Scroll) Series (No. 11)



山田彊一 (やまだ・きょういち / 1938 -)

名古屋市生れ。1959年現・愛知教育大学卒。64年ニューヨークの「日本人アーティスト選抜14人展」に出品。67年シェル美術賞展で佳作賞。85年和歌山版画ビエンナーレで大賞、86年IBM絵画コンクールで大賞を受賞。

# 菅野圭介 《蔵王雪山》

## 教科書に載っています

ご存知、梅野隆さんが愛してやまなかった菅野圭介の作です。この絵は絵画館の常設展示室か館長室にときおり登場してきましたが、昨年あたりから展示する頻度が多くなってきました。それは、中学校の美術の教科書に載ったからです。美術館の収蔵品が教科書に掲載されるなんてそんなにあることではないです。少しは自慢してもいいですよ。

●開隆堂版 中学美術科一年 一四ページ

●紹介記述 「心ひかれる風景」「表し方を工夫する」 風景を大胆に単純化し、雄大な雪山の形をはっきりとした色彩でとらえて表現している。

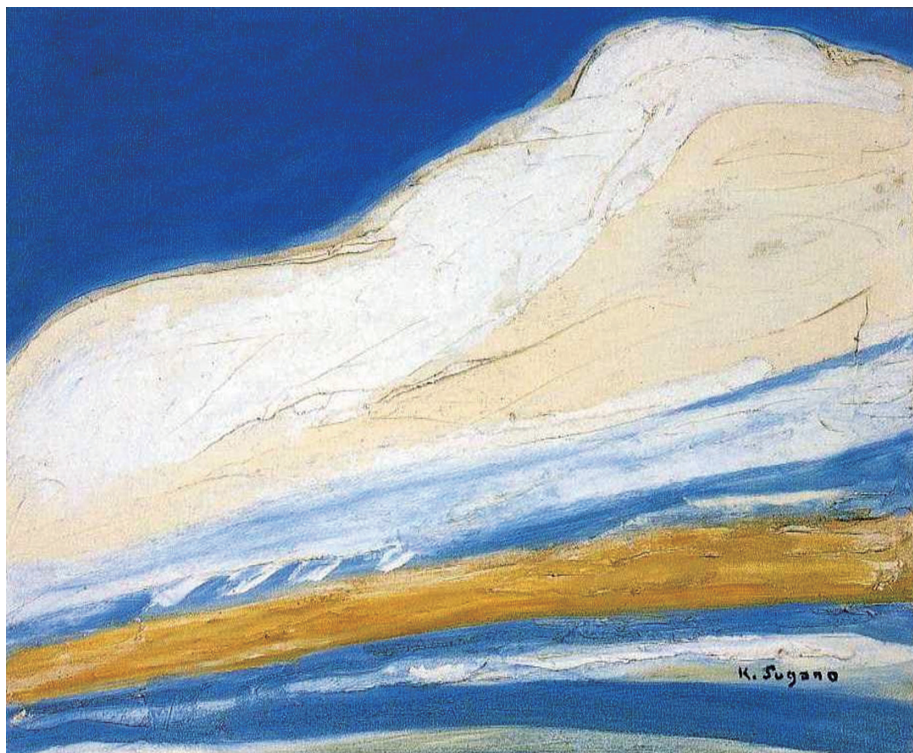
さすが教科書の紹介文です。過不足なく特徴を伝えています。

佐藤 修 (長野県東御市)

## 菅野圭介 《蔵王雪山》

油彩・キャンバス 45.2 × 53.0cm 1955年頃

Sugano Keisuke Snowy Mt. Zao



### 菅野圭介 (すがの・けいすけ / 1909 - 1963年)

東京生れ。京都帝国大学文学部中退。1935 - 37年欧州巡遊。フランドランに師事。38年独立美術協会賞を受賞。41年日動画廊で個展。43年独立美術協会会員。52年渡米、ブラジルを経て欧州へ、同年帰国。東京で没、53歳。

# 中村忠二 《アオイテガミ》

## 忠二の夢日記

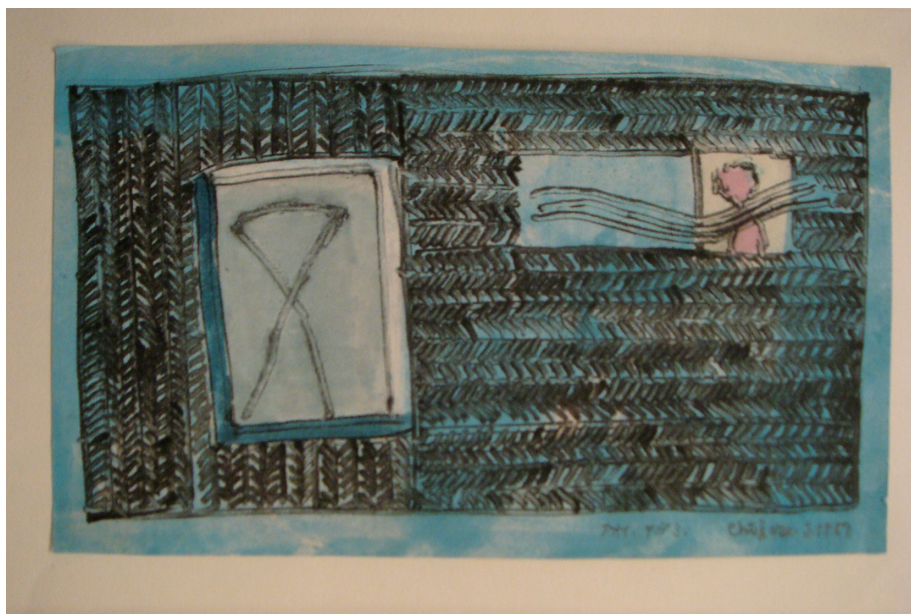
いっさいの俗から抜け出して、描きたいものを好きなように描く。野草も虫けらも同じ生き物、描き上げた絵はピエロの日記。描くことは生きること、これ以上の純粋はない、これ以上の自由はない。

佐藤 修（長野県東御市）

中村忠二 《アオイテガミ》

モノタイプ、水彩・紙 15.0×24.0cm 1967年頃

Nakamura Chuji A Blue Letter



中村忠二（なかむら・ちゅうじ／1898－1975年）

兵庫県生れ。1918年上京。日本美術学校入学。28年詩集『願望』を出版。白日会展、光風会展、国画会展に入選。36年文展鑑査展に入選。51年日本水彩連盟会員。58年よりモノタイプで虫や花の作品を制作。75年没、77歳。

# 中村忠二 《ははこぐさ》

## 全ては忠二の独り言

この絵は、中村忠二が亡くなった翌年（一九七六年）に、東京新聞出版局より刊行された忠二の画文集『花と虫とピエロと』に掲載された作品の原画です。

柔らかな色調と、おどけたような仕草に見える母子草の枝ぶり、滋味あふれる添え書きは忠二の独り言。何とも心なごむ絵です。

忠二が晩年を過ごした東京の練馬区貫井の住処は掘っ立て小屋のようなものだったそうです。そこで忠二はそこいらに生えた草花をスケッチし、足もとを這いずるおけらやだんご虫に語りかけました。自分も虫たちと共に在る、という一種宗教的な達観に包まれた忠二の晩年の作であり、私を忠二コレクターに走らせた逸品であります。

佐藤 修（長野県東御市）

中村忠二 《ははこぐさ》

モノタイプ、水彩・紙 25.0×15.0cm 1972年頃

Nakamura Chuji *Hahakogusa (Gnaphalium Affine)*



中村忠二（なかむら・ちゅうじ／1898－1975年）

兵庫県生れ。1918年上京。日本美術学校入学。28年詩集『願望』を出版。白日会展、光風会展、国画会展に入選。36年文展鑑査展に入選。51年日本水彩連盟会員。58年よりモノタイプで虫や花の作品を制作。75年没、77歳。

# 中村正義 《おとこ》

日本画家でありながら、自画像ならぬ《おとこ》を、油彩画で描く正義。

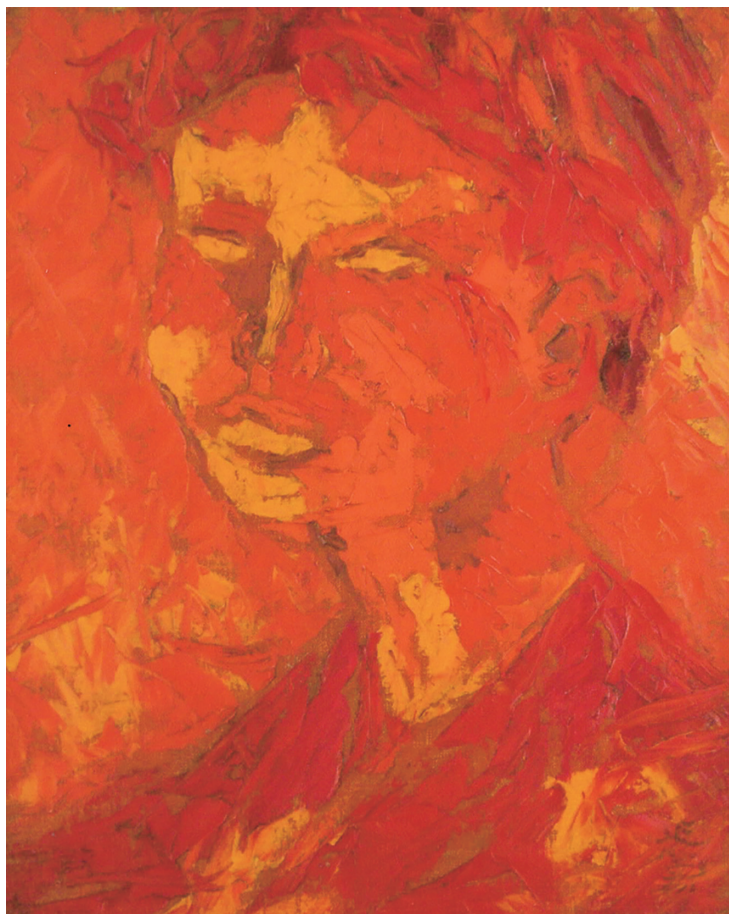
この年は、正義の持病の肺結核が悪化していた。日展より無鑑査として、出品を依頼されたが、制作がままならず、不出品となった。また共に同病で病んでいた奥さんから「自分がいては、足手まといになるばかりだから……」と彼女の方から申し出があり、協議離婚し、治療に専念するが、病状は悪化する一方で芳しくなかった。国立療養所に入所し、外出もままならぬ、闘病生活のなかで、自分を見つめる制作に明け暮れていた。精神的にも追い詰められ、この時期に《自画像（ノイローゼ）》を描いている。正義のこの年の手紙に「私は何といわれても、褒められても、けなされてもなんともない。この生命の続く限りじっくりと描きつづけます」と記している。この年は、自画像制作が多く、この作品も無題であり、当初自画像と表記していたが、全体の感じが正義と異なることから、今回から《おとこ》と改題した。作品は、瞳を描かず、強烈な色使いで、タッチも激しい。遠くを見つめる男は何を思っているのか。正義のそんな時期の作品の一点である。この年に、洋画的な題材のガスタンクを描いた《ガスタンク》という小品が存するが、小品ながら秀作である。洋画も、日本画も見事こなしている。

丸山治郎（東京都中野区）

中村正義 《おとこ》

油彩・キャンバス 45.5 × 38.0cm 1954年

Nakamura Masayoshi A Man



中村正義（なかむら・まさよし／1924 - 1977年）

豊橋生まれ。1946年中村岳陵に師事、日展初入選、50、52年特選。60年新日展審査員。61年日展を脱退。守旧派に対抗、旧画風を一新し斬新な作品を制作。73年从会を結成。75年東京展を立ち上げる。川崎の病院で没、52歳。

# 小山田二郎 《幻の鳩》

小山田を望み待つこと二〇年、この作品の水彩の輝きを見てほしい

小山田の作品の良品を求めて、関係画廊を回ること二〇年、油彩画を見、水彩画を見てまわった。大作を見てはタメイキをついた。素晴らしい、文句のつけようがない。小山田の微かな叫びが聞こえる。うめきを感じたこともあった。一時期、小山田は身を隠していた。晩年は幸せそうであった。そう見えた。絵も明るくなったように思えた。画商も変わってなんでも言えるようになった。私の求める大きさに制限があるためか、なかなか私が目指す作品に出会えなかった。私以前に、小山田の素晴らしいコレクターがいた。全財産をかけているように感じられた。彼には情熱も、作品を見抜く眼も劣る。待つこと二〇年が過ぎた或る日、薄ぐらい地下の画廊で、この作品に出会った。一瞬感動が全身に走った。値段を聞いて驚いた。油彩に匹敵する価格に思えた。交渉しても彼は仲間と競ったので、どうにもならないと、かたくなであった。私は作品の見事さに負け、それ相当の対価で求めることとなった。この作品には、モノクロのカタログがついていた。『小山田二郎水彩画集』副題は「幻の鳩」、花と風船とある。私が求めた作品はその副題のひとつ『幻の鳩』であった。一九六九年の飯田画廊刊行。みなさんも時間をかけて、じっくり作品を見て下さい。

丸山治郎（東京都中野区）

小山田二郎 《幻の鳩》

水彩・紙 35.2 × 25.8cm 1968年

Oyamada Jiro Phantom Doves



小山田二郎（おやまだ・じろう／1914 - 1991年）

中国生れ。帝国美術学校図案科、西洋画科中退。独立展、美術文化協会展に出品。自由美術家協会会員。日本国際美術展、現代日本美術展等に出品。1957年サンパウロ・ビエンナーレに出品。91年没、77歳。

# 井上長三郎《猫》

過去の井上の展覧会では見られない作品、色彩も猫の表情も独自で輝いている

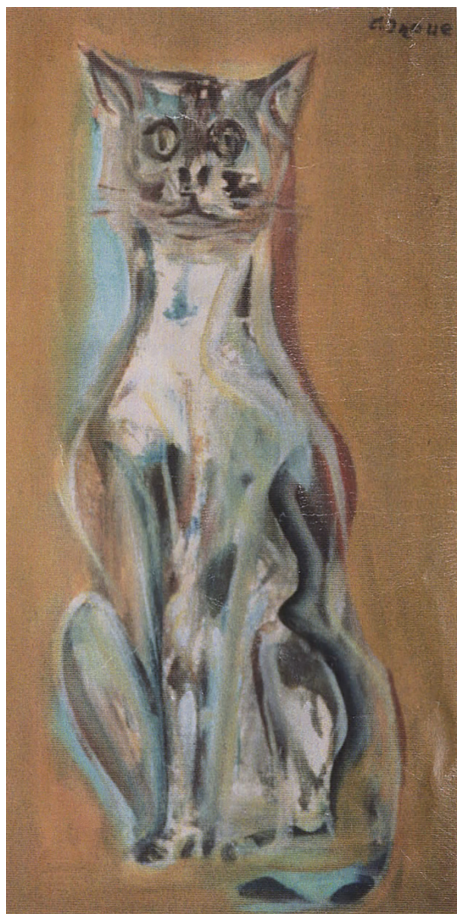
井上の過去の展覧会図録をめぐって気がつくのが、流麗な、流れて走るような線描の作画と、茶系統の色彩を駆使した作品である。どうしても暗いイメージが重なる。今回の作品の《猫》のような色彩とトボけた猫の表情が見られるような作品は数少ない。《桃》とか《柿》とか《シルクハット》《少女》などの明るい色彩の作品は、大手町画廊主のコレクションである。《牛》二〇号の良品も毎年正月、画廊正面のウインドーに陳列し楽しませてくれたが、生前手放そうとはしなかった。井上の代表作である《漂流》《葬送曲》など、井上の手許から引き出したのも彼だと受け賜っている。いつも酒を交わして楽しそうに仕事から帰られるようであった。その画廊のご主人が亡くなられて暫くして、奥様から、何か希望される作品がおりならお分けしてもいいですよとお話があった。嬉しいお話であった。私の予算も検討して、何回かに分けて購入させていただいた記憶がある。そうして、今回の《猫》や、《シルクハット》《柿》《牛》など買い続けた。資金が続かず《桃》の良品を逃したのが残念であった。その後も他の関係画廊から、異色の《裸婦》や、兜屋シールの《作品》や、山梨に疎開していた当時の作品《農家》と出会い、収集を続けている。井上の彫刻や、自画像デッサンも、その出会いであった。ここ二三年程、藤田嗣治との関連で、戦中期の井上を追跡、捜査していて、新発見もあり、大きな成果があったので期待していただきたい。井上は素晴らしい作家です。

丸山治郎（東京都中野区）

## 井上長三郎《猫》

油彩・キャンバス 53.0 × 33.3cm 1970年頃

Inoue Chozaburo A Cat



井上長三郎（いのうえ・ちょうざぶろう／1906－1995年）

神戸市生れ。太平洋画会研究所で学ぶ。巖光、鶴岡政男と交友。1927年「一九三〇年協会」展で奨励賞。31年独立賞。35年独立美術協会会員。38年渡仏。39年美術文化協会会員。43年新人画会結成。47年自由美術家協会会員。95年没、89歳。

# 早川義孝 《漁村の白い夜》

## 月明かりの下、幻想の漁村

オークションで出会った絵である。少しばかり熱くなって応札した記憶がある。自身、こと絵画に関し造詣どころか基本的知識さえ浅薄な輩故、不知の作家の作品を取得するのであれば慎重を期するのが普通であった。所謂、下手の横好き故、日頃、懐具合を考慮し再吟味するくらい用心深かったつもりであるが、この作品に出会った時、自身の嗜好の何物かに強く牽引された感がある。後に知り得た情報であるが、この作家の作品は、豊かな色彩で詩情溢れる幻想的対象風景をモチーフにすることが特徴だそうである。

この作品には、云われるような艶やかで豊かな色彩は用いられていないが、それを凌駕するような薄暗闇に浮かぶ白の色彩が、漁村の孤高と静寂の月夜の詩情を醸し出していると感じ入っている。

この作家の最高傑作のひとつであると、個人的見解をもっているのである。

薄井良昭（東京都墨田区）

### 早川義孝 《漁村の白い夜》

油彩・キャンバス 38.0 × 45.0cm 制作年不詳

Hayakawa Giko A White House in a Fishing Village



早川義孝（はやかわ・ぎこう／1936－2012年）

東京生れ。1954、55年日本学生油絵コンクールで文部大臣賞を受賞。武蔵野美術大学中退。62年新槐樹社展で内閣総理大臣賞、文部大臣賞、栄誉賞を受賞。新槐樹社名誉会長。2012年没、76歳。



# 木村忠太 《木陰》

## 抽象の中の具象

緑の色彩の豊かさと木陰の佇まいを気に入りに置かれた絵である。この作者の作品に、そう数多く出会ったわけではないが、彼が好んで用いていたと思われる緑の色彩から自然の息吹が感じられ、魅了される。彼の緑が、とても好きなのである。永きにわたるフランスでの絵描きとしての活動から、むしろそちらで評判が高かった画家だそうである。母国で、もう少し評価が高まったとしても不思議ではない作家に思えてならない。

薄井良昭 (東京都墨田区)

木村忠太 《木陰》

油彩・板 50.0 × 61.0cm 1980年

Kimura Chuta *The Shade of a Tree*



木村忠太 (きむら・ちゅうた / 1917 - 1987年)

高松生れ。1942年独立賞を受賞。43年帝国美術学校に学ぶ。48年独立美術協会会員。53年渡仏し定住する。70年サロン・ドートンヌ会員。パリで没、70歳。

# 高木義夫 《早春》

## 個性的美人の肖像画

これを入手してから既に四〇年強が経過している。かびが酷く、安価で取得出来たと記憶する。当時、絵画の修復依頼なぞ初めての体験であったが、受託可能な画商を探し出し持ち込んだ思いがあつた。その際、社交辞令であろうが、「いい絵ですね」と賞賛されたことを世辞とは承知していたが、嬉しかった記憶がある。

実は、共箱には「少女」と記した題書きがあつたが、作者の字体には見え、題は画面に記載のある《早春》とした。これは創作年の時期が一九五五年早春とも取れる。意志が強そうで個性的な大人の女性肖像に思えて「少女」という題に納得しかねた面もある。創作年代からすれば、戦後女性の強い側面を象徴した絵に思えてならない。

この作家の他の多くの美人画からすると、多少異色の作品と思うが、個人的には魅力的な美人画だと気に入っている。

薄井良昭（東京都墨田区）

高木義夫 《早春》

岩彩・紙 57.0 × 51.0cm 1955年

Takagi Yoshio *Early Spring*



高木義夫（たかぎ・よしお／1923 - 2001年）

東京生れ。1941年伊東深水に師事。59、61年日展特選。63年日展菊華賞。69年日展白寿賞。76年高山辰雄に師事。78年日展総理大臣賞。92年勲三等瑞宝章。日本美術院同人、同理事。東京で没、78歳。

# 増田 誠 《チェスするキング》

## 「遊びに興ずる男」

平成一四年秋、兄が拙宅を訪れ持参した絵である。翌年一月に彼は亡くなり、その時、形見のつもりであったかと得心した作品である。それより随分以前のことになるが、小生が偶々、兄宅を訪問した際、「いい絵ですね」と褒めたことを、彼は記憶していたのであろう。

この絵を見ると、彼は麻雀・競馬を愛し、概してギャンブルセンスのあったという印象を思い起こす。又、お互い酒席を愛好する血筋のせいか、宵の銀座でばったりなどということも懐かしい。この絵を見るにつけ彼が気に入って取得した由縁が分かる思いがするのである。

その後、この画家の作品を数多く見るうちに、存外、画家本人も生活の中での遊びが上手ではなかったかと想像したりする。

余談になるが、あの当時、彼の自宅玄関にあった外国人作家のリトグラフは、海辺に遊ぶ子供達を淡い色彩で描いた暖かみのある絵であったが、彼が子供時分過ごした疎開中の房総の寒村の浜辺を思い出させる絵であったのだろう。これもまた、よい絵だった。

薄井良昭（東京都墨田区）



増田 誠 《チェスするキング》

油彩・キャンバス 41.0×32.0cm 制作年不詳

Masuda Makoto *The King Playing Chess*

増田 誠（ますだ・まこと／1920 - 1989年）

山梨県生れ。一線美術会委員。1957年パリに定住。60年シェルブール国際展でグランプリ受賞。サロン・ドートンヌ会員、サロン・ナショナル・デ・ボザール会員。ル・サロンで金賞無鑑査。横浜で没、68歳。

## 二見彰一 《バルトークの部屋》

### 音楽家の運命までも読み込んだ傑作

この銅版画は一九七〇年、二見彰一氏、三八歳の作品。作家は制作動機をこう言う。「バルトークの音楽の中に展開する、大胆な不協和音や不協和音程と、特徴のあるハンガリーの民族的リズムを聴いた時、絵画的なイメージを感じて作ったものです」

いくつかの得体の知れない、浮遊する物体。不協和音と共に上下左右に震動し、消滅していく。その瞬間、右上の尖った物体が加速しつつ、地面に突き刺さる。そして青の背景のみが残る。バルトークの生涯を象徴しているようだ。私はこう感じた。

バルトークは一九四五年九月、亡命先のニューヨークで、六四歳の生涯を閉じた。仮に母国ハンガリーに無事、帰国できたとしても、スターリニズムの嵐の中、生きるためには体制讃歌の曲を書かざるを得なかったであろう。米国で客死したことは、のちの彼の評価の上で、プラスであったかも知れない。運命の皮肉といえようか。

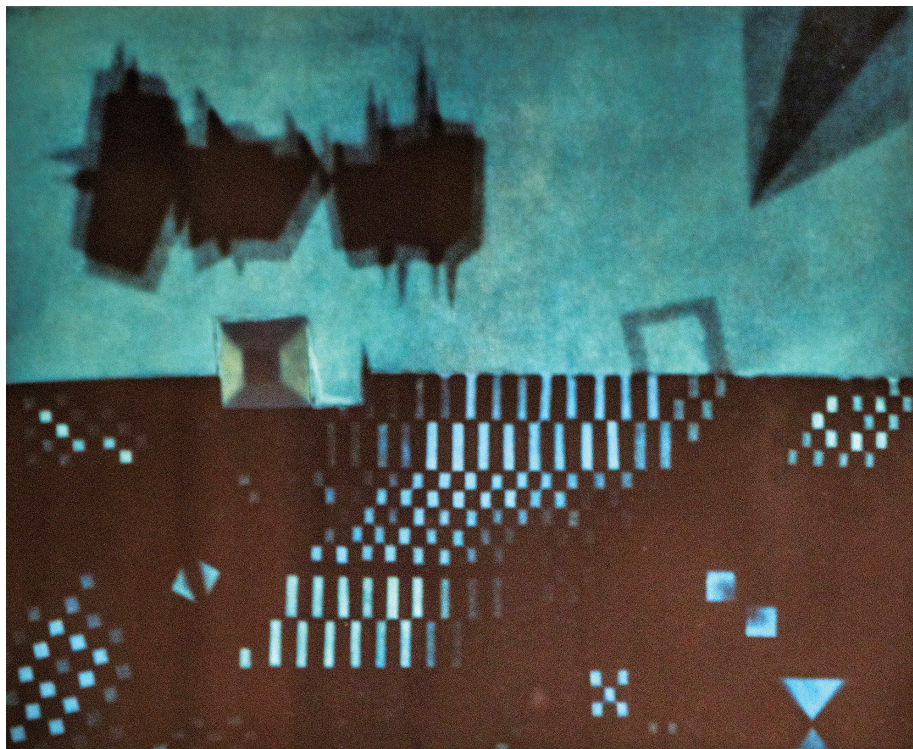
二見作品については、ロマンチックな叙情性、詩と音楽の絵画化と言われている。だが、この画に関する限り、そこから一步踏み込んで叙情性の奥に潜む悲劇、そして運命性が見え隠れしている。そこにはロマンチックな世界とは、やや異なる次元が表現されているように思う。数多くの二見作品の中で、この初期の版画は私のとくに好きな作品の一つである。

鈴木正道（千葉県柏市）

## 二見彰一 《バルトークの部屋》

アクアチント・紙 24.2 × 30.0cm 1970年

Futami Shoichi The Room of Bartok



### 二見彰一（ふたみ・しょういち／1932 -）

大阪生れ。1967年春陽会研究賞を受賞。71 - 88年春陽会会員。73 - 2011年日本版画協会会員。ドイツを中心にヨーロッパで銅版画家として活躍する。11年神奈川県立近代美術館で個展。13年静岡県立美術館で個展。

# 村井正誠 《雨の中の少年》

## これぞ真の童謡の世界

私が柏に引っ越して今年の秋で、四八年になる。その年の暮、《雨の中の少年》がやって来た。兄からの引越祝であった。

この石版画のおかげで、私は抽象画に興味を持つようになった。抽象といっても、明らかに少年像とわかる。来客、とくに若い女性はこの画を見て、「かわいい」を連発する。顔は説明するまでもなく、太い、黒い輪は雨傘であろう。私は「あめふり」（北原白秋作詞、中山晋平作曲、大正一四年）を口ずさんでしまう。まさに童謡そのものの世界である。

しかし、太平洋戦争末期から敗戦後の混乱期にかけて小学生時代を送った私にとっては、「母さんが蛇の目でお迎え」など、許される時代ではなかった。

この作品は一九五九年の制作。敗戦から一四年経過し、戦後の混乱から、ようやく立直ることが出来た時代であった。それは外的要因が多々あるにせよ、国民の忍耐と努力の賜物である。因みに一九五六年の『経済白書』のキャッチフレーズは「もはや戦後ではない」であった。もうこの頃になると蛇の目ではなく、洋傘で送り迎えすることが、当たり前となった。私も貧しいながら、楽しい学生生活を送ることが出来た。

私は梅雨の到来と共に、この画をわが陋屋ろうくわの壁に掛ける。そして眺めるたびに、来し方を偲び、感慨に耽ひたれることがある。不思議な画だ。

鈴木正道（千葉県柏市）



村井正誠 《雨の中の少年》  
石版・紙 47.0 × 37.0cm 1959年  
Murai Masanari A Boy in the Rain

村井正誠（むらい・まさなり／1905 - 1999年）

岐阜県大垣生れ。1928年文化学院美術科卒。28 - 32年渡仏。37年自由美術家協会創立。50年モダンアート協会を創立。54年武蔵野美術大学教授。73年神奈川県立近代美術館で個展。東京で没、93歳。

# 大沢昌助 《森にいく道》

具象画だが、何と不可思議な世界であろう

時は盛夏、一点の雲もない晴天の昼下がり。房総の田園風景であろうか。黄色い地面、木立の奥の森、茅葺の田舎家、そして右下の森にいく道。ほぼ原色で描かれているのが新鮮だ。森の中には一体、何者が住んでいるのだろうか。

大沢氏の銅版画に《森の中》（一九七六年）という小品がある。緑のバックに、長い、緑色の髪を持つ乙女。ややボーイッシュな印象を受けるが、限りなく妖精に近い女の子だ。森の中は、彼女の住処であろう。

毎年、夏の到来と共に、私はこの二点を並べて掛ける。私が早朝の、半ば寝ぼけた眼をこすりながら眺る時、宮崎駿監督の「千と千尋の神隠し」（二〇〇一年）のような、不思議なイメージを感じることもある。森の中には、妖精の如き美少女と共に、心根のやさしい妖怪変化も住んでいるのかも知れない。《森にいく道》、それは具象画ではあるが、単なる写実とは、異なる世界のようなだ。

私はこの画を勝手に、大沢氏の「辞世の画」と認識している。辞世というと、画であろうが、文章であろうが、無念さと俗世への執着が行間に表われているものだ。だが、この作品には全くない。新しいものに挑戦し、絶えず変貌を続けた、一人の芸術家の姿のみが残る。

私はこの画を一九九七年春、一画廊での新作展で求めた。その数日後、大沢先生は急逝した。あれから二〇年も過ぎた。

鈴木正道（千葉県柏市）

大沢昌助 《森にいく道》

アクリル・ボード 21.0 × 26.5cm 1997年

Osawa Shosuke *The Way toward the Woods*



大沢昌助（おおさわ・しょうすけ／1903 - 1997年）

東京生れ。1928年東京美術学校西洋画科卒。42年二科賞。43年二科会会員。54年多摩美術大学教授。65年国際形象展で受賞。81年池田20世紀美術館で個展。91年練馬区立美術館で回顧展。95年中村彝賞受賞。東京で没。93歳。

# 篠田桃紅 《Sprout》

## 粹な風景を連想させる初期の抽象画

私が桃紅作品に初めて接したのは、一九七〇年であった。あるデパートで家内がリトグラフ《Sprout》を求めて以来、四七年になる。彼女は茶の湯との関連から、書に関心を持っていた。多分、お茶事の際、玄関に掛けようと思っていたのであろう。

年譜によれば、リトグラフの制作をはじめたのは一九六〇年とのこと。フィラデルフィア美術館から来日した刷師アーサー・フロリーの勧めによるものらしい。

この作品は一九六〇年代の制作、ごく初期のものである。桃紅氏の抽象画は言うまでもなく、書の延長線上にある。白黒作品ではあるものの、細い線が小気味よく躍動し、一人の閨秀書家が和服姿で、背筋を伸ばして立っている印象を受ける。また、下町育ちの私は、大川に沿って植えられた柳が、初夏の風を受けて、一斉に揺れ動く光景を連想した。場所的には、両国橋から、新大橋にかけての、浜町周辺の風景である。私が若い時分、朝な夕なによく散歩したコースでもある。

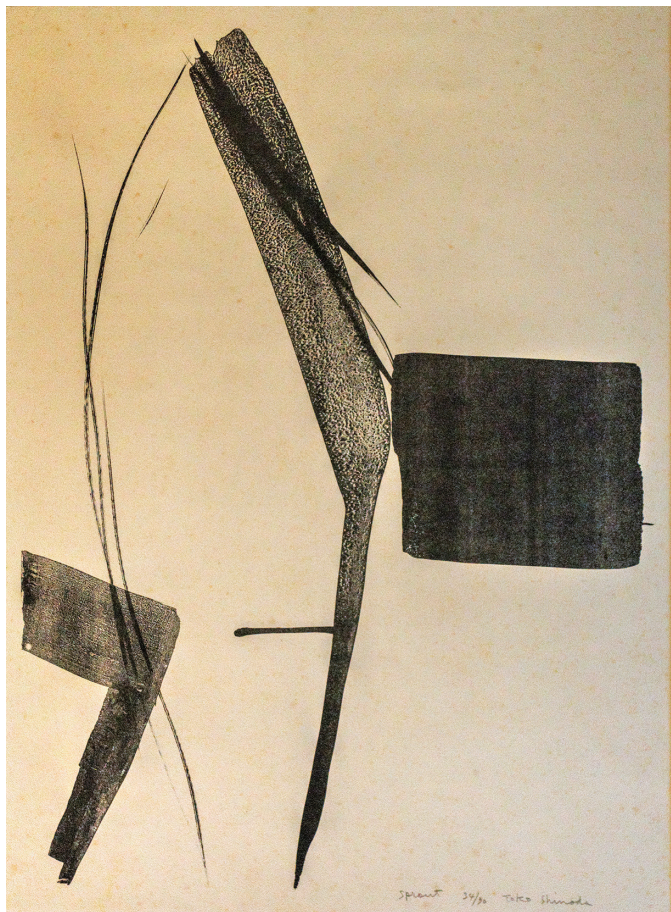
このリトグラフを購入以来、いまままでに二十数点、収集して来た。私ども夫婦の最大の買い物、それは桃紅氏の書（掛軸）であろう。「君看雙眼色」（君看ヨ雙眼ノ色）、『禅林句集』の一節を書いた一九八〇年の書である。この五言対句は良寛をはじめ、多くの書家によって揮毫されて来たが、私は桃紅氏の書に魅かれる。

鈴木正道（千葉県柏市）

## 篠田桃紅 《Sprout》

リトグラフ、一部手彩・紙 52.0 × 38.5cm 1960年代

Shinoda Toko *Sprout*



## 篠田桃紅（しのだ・とうこう／1913－）

中国大連生れ。下野雪堂に書を学ぶ。1936年鳩居堂で個展。47年抽象作品を制作。51－56年書道芸術院に所属。56－58年渡米。積極的に個展を開催。61年ピッツバーグ国際現代絵画彫刻展で特選。92年岐阜県美術館で個展。

# 嶋田しづ 《刻みゆく時の流れ》

## 陰陽合わせもつ巴里時代のリトグラフ

抽象画のおもしろさ、それは脳を通して具象画に変換する楽しさです。鑑賞者の見方と作家の意図とは著しく異なることは当然です。

この作品の中央にあるものは自動車でしょうか。その右の、大きな瞳の女性がドライバー。多分、キャリアアー・ウーマンでしょう。猛スピードで大通りを走行する姿が連想されます。世の男性方、聲高に「カツコイイー」と叫びそうな情景です。

このリトグラフは一九七七年の制作。嶋田しづ氏のパリ時代のもの。日本をはじめ、先進国の多くは、いわゆるクルマ社会に入っています。左上の女性は恐らく、冷やかな眼でこの情景を眺めているのでしょうか。

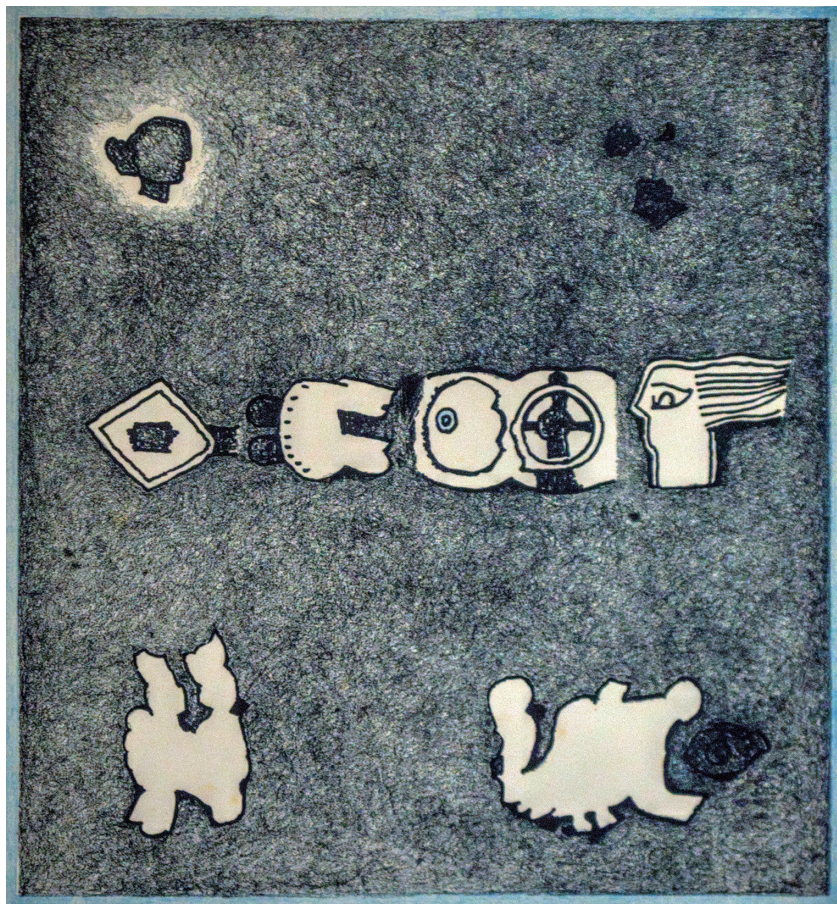
下の白ヌキの動物らしきもの、私には化石のように見えます。右は原始鳥でしょうか。驕りおごりの春を満喫しているかのような、若い女性、長い人生の一瞬にしか過ぎません。

私はこの画を眺めている時、東洋的な無常を感じることはありません。嶋田氏特有の、華やかな世界とは、趣を異にしております。

《刻みゆく時の流れ》、実にいい題名ですね。私はハンフリー・ボガートとイングリット・バーグマン主演のハリウッド映画「カサブランカ」(一九四二年)を連想することもあります。この画の女性、若き日のバーグマンかも知れません。そして、主題歌「時の過ぎゆくまま」(As Time Goes by)を想い出します。私は学生時代、うす汚い、場末の映画館で見た憶えがあります。

鈴木正道(千葉県柏市)

嶋田しづ 《刻みゆく時の流れ》  
リトグラフ・紙 24.0×23.0cm 1977年  
Shimada Shizu The Flow of Ticking Time



嶋田しづ (しまだ・しづ/1923-)

樺太生れ。1942年女子美術専門学校師範科西洋画部卒。45年早稲田大学文学部美術史料東洋美術史専攻修了。57年二紀会最優秀賞を受賞。58-78年パリ在住。2007年池田20世紀美術館にて個展を開催する。



# 大澤 寛 《浜辺》

## 美術教育に捧げた人生

東京美術学校を卒業後、三八年間にわたり埼玉県立川越高等学校の美術教師として生涯を美術教育に捧げた。

自作を「生徒に影響を与えてはいけない」と余り披露することをせず、長澤英俊、関根伸夫、長沢秀之等の個性あふれる逸材を美術界に送り出している。

寡作で残された作品は多くはない。誠実に謙虚に制作を続けた。

小生は美術を選択しなかったが、白衣を着た物静かな先生という印象が残っている。

《浜辺》は先生がそのまま作品になったようで、品格が漂い、静寂の中、画面に吸い込まれていく。日頃我が家の壁を占領していることが多く、とても気になる存在である。

新井 博（埼玉県川越市）

大澤 寛 《浜辺》

油彩・キャンバス 24.3 × 33.4cm 1986年

Osawa Hiroshi *The Beach*



大澤 寛（おおさわ・ひろし／1924 - 2007年）

埼玉県富士見市生れ。1949年東京美術学校師範科卒。49 - 87年川越高等学校で美術教師を務める。2007年没、83歳。